

# 經濟論叢

第137卷 第3号

## 平田清明教授記念號

---

献 辞	池 上 惇	
マルクス管見	菱 山 泉	1
比較経済学序説	伊 東 光 晴	12
現代資本主義と経済政策の課題	清 水 嘉 治	33
マルクスのインダストリ論	山 田 銳 夫	54
スミス世界史像の再検討にむけて	野 沢 敏 治	71
ケネー『経済表』「原表」の マナー・フロー分析	浅 野 清	91
資本における所有・序説	八 木 紀一郎	114

平田清明 教授 略歴・著作日録

---

昭和61年3月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## マルクスのインダストリ論

山 田 鋭 夫

### I 問題の所在

資本主義対社会主義という世界了解の構図が疑問に付されてすでに久しい。この二項対立の図式が完全に失効してしまったと言いきれないとしても、少なくともこの図式に安居するのみでは、現代世界がかかえる根源的なプロブレマティックをすくい取ることができなくなっていることは確かであろう。かわって現代を規定するあたらしい概念が、さまざまに提起されてきた。

「産業社会 (industrial society)」ないしは「産業主義 (industrialism)」もそのひとつである。それによれば現代資本主義と現存社会主義とは、ともども産業主義の二類型であって、工業化、産業化、近代国民的生産力の展開を至上目的とする体制原理そのものは共通しているし、現に両社会はますます産業社会として収斂しつつあるという。そればかりでない。第三世界の諸国も、その政治経済制度がどのようなものであれ、結局は産業社会化を目ざしていることに変わりはないのではないか。こう捉える産業社会論は、たしかに現代認識にとって考慮されてよい、ひとつの有効な視角を提供している。

ところで産業社会論とは、上のことをいうに終っているのではもちろんない。重要な点は、そのような近現代社会の認識のうえにたつて、それをどう評価し判断するか、現代におけるその帰趨をどう見定めるかにある。いわゆる脱産業社会論にみるように、産業社会の多分に安楽なる死を見届けるのもひとつの見方ではあろうが、ここでは、さまざまな産業社会批判論が提起しているように、歴史としての現代の、産業社会としての問題性をあらためて審判に付そうとの課題意識を共有したい。産業化といい、産業的生産力といい、近現代を領導し

てきた産業主義なるものは結局のところ何であったのか。これがまず批判的に認識されてこそ、産業社会をどう超えるかの方向も示唆されてくるはずだからである。

このような角度からマルクス論の世界をふりかえるとき、そこではしばしば、マルクスの未来は近代産業がうみだした物質的生産力の継承のうえに樹立されるべきものとしてあったのであり、マルクス理論は結局のところ産業社会の枠内にとどまるものでしかない、と説かれ、こうして産業主義者＝マルクスの像が罷りとおっているかのようである。のみならず、産業的生産力が現代にもたらした自然破壊や人間の管理と抑圧にたいして、マルクス思想もひとしく責を負うべきものとされる。肝腎な点はいくまでも、現代産業社会の批判的認識にあるのであって、それを前にしてマルクス思想の免罪にあるのではないが、ここでマルクスの諸著作に内在することをとおして、逆に産業社会批判への一視角を拓くことができるとするならば、マルクスのインダストリ論を検討することは不可避の課題となる。はたしてマルクス思想とは産業社会讃歌のそれなのであろうか。マルクスのコミューニズムとは所詮は産業主義を乗りこえるものではありえないのか。しかも思想の根本においてどうなのか。

こうした観点から、マルクスにおける「産業 (Industrie, industry)」の概念を整序しようとするのが、本稿である。ところでヨーロッパ語では、とくに英語では、industry はたんに「産業」であるのみならず同時に「勤勉」を意味する。というよりも歴史的には、この語は「精励」「勤勉」「勤労」という人間的属性ないしは主体的要因を指示することばとしてまず存在し、やがて「工業」「産業」などといった客観的ないしは物質的・経済的な含意が優勢となるにいたったものである。そのこと自身が、art なる語の命運と同様、近代認識上のひとつの問題的焦点をなすのであろうが、いまは問わない。とにかくこのような経緯をもちつつも、この industry は基本的に両義をそなえたものとしてあり、マルクスにおいても例外でない。そのようなニュアンスを表現するものとして「産業労働」「産業活動」の訳語も考えられないわけではないが、以下で

は英語表音に即した「インダストリ」を採用する。

## II 市民思想におけるインダストリ

マルクス・インダストリ論の位相を問う前段階として、あらかじめ市民社会思想におけるそれを一瞥しておくのが好便であろう。「経済学批判」というマルクスの課題がそうであるように、否、その「経済学批判」の重要な一環として、マルクスのインダストリ論は市民的インダストリ論の継承と批判のうえに立論されるものであるからには、はじめに前提としての市民的インダストリ論を簡単にふりかえるべきだろう。取りあげるのは18世紀の D. ヒューム、J. スチュアート、そして A. スミスである。

ヒュームが近代市民社会を特徴づける原理としてインダストリないしはアート・アンド・インダストリをつかみ出し、これをもって市民社会認識の基礎視角に据えたことは、よく知られている。『政治経済論集』（1752年）の彼はこう書いていた。「インダストリとアーツが栄えている時代には、人びとは絶えず仕事に従事し、労働の果実である快樂だけでなく、仕事じたいをもその報酬として享受する。精神は新しい活力を獲得し、その力と能力を増大する。そして実直なインダストリに精励することによって自然な欲望を満足させるだけでなく、安易と怠惰とに養われたさいに通常生ずる不自然な欲望の成長をも妨げる。」「事物の最も自然ななりゆきによれば、インダストリとアートとトレードとは、臣民の幸福だけでなく、主権者の力をも増大させるものである。」<sup>1)</sup>

近代的なインダストリの体系にあっては、人びとは「絶えず仕事に従事する」のであるが、それというのも彼らは仕事じたいを「享受する」のである。いや、たんに仕事の享受にとどまらず、それをとおして精神的にも新しい活力と能力を展開し、またみずからの欲望を解放して生活水準を向上させる。ヒュー

1) D. Hume, *Essays Moral, Political, and Literary*, in *The Philosophical Works*, ed. by T. H. Green and T. H. Grose, vol. 3, 1964, pp. 301, 292-293. 田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』1983年、21、10ページ。ただし本稿の視角上、industryなどを原音表記に改めた。強調はすべて引用者。以下同じ。

ームはこれを「奢侈 (luxury)」という。そして、そのような人民を擁する国家こそ強大な国家なのである……と。このようにインダストリの体系とは仕事と欲望の体系なのである。そればかりでない。「インダストリと知識と人間性とは、解き離し難い鎖でつなぎ合されている」<sup>2)</sup> との有名なことばに示されるように、インダストリこそは人間性の自由な展開、諸個人の自主的な自己実現を約束する人間解放的契機なのであった。そういうものとして近代の生産力の根幹を形成するものであった<sup>3)</sup>。

このようなヒュームのインダストリ観は、経済分析の視角における「貨幣的世界から実物的世界への転換」となってあらわれる。すなわちヒュームは、彼の経済理論体系を、つまり貨幣・信用、外国貿易、財政、人口の諸理論を、まさにこのインダストリとその増大を基本視角にすえ、これとの因果関係のなかで展開していく<sup>4)</sup>。インダストリこそ、貨幣や人口など経済諸量の変動の独立変数なのであって、貨幣量などはインダストリ量の従属変数でしかないからである。

以上、ヒューム・インダストリ論の基本性格を、当面のわれわれはつぎの二点に要約しておこう<sup>5)</sup>。(1)ヒュームにあたってはインダストリは、すぐれて生産力的な、しかも人間解放的な契機として捕捉されていること。これを別言すれば、インダストリが単純商品生産の側面から把握されていて、資本-賃労働関係の面がまだ視界にはいってこないということでもある。(2)このことから当然に、ヒュームは市民社会の、否およそ人類の、発展をひとえにインダストリの増大と等置することになる。しかも人為的な増大でなく、自然的・自律的な増大の方向性のうちにこそ、発展への道が存するのであった。

ヒュームの著作から15年後、ステュアートは『経済学原理』(1767年)によ

2) *ibid.*, p. 302. 前掲邦訳22ページ。

3) つぎを参照せよ。小林昇経済学史著作集I『国富論研究』(1), 1976年, 27-28ページ。田中敏弘『イギリス経済思想史研究』1984年, 107ページ。

4) 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』1971年, 31ページおよび第8章。

5) 同上書, 202-203ページ, 参照。

ってヒュームのインダストリ論を継承する。もちろんそれはヒュームの復唱にはとどまらない。ステュアートはヒュームから、インダストリを近代的生産力の基本にみる視角を学びとりつつも、このインダストリの特殊近代的な歴史的な性格をすどく浮彫りにする。インダストリをレイバー (labour) との対比において抽出するのである。

「インダストリはレイバーと異なる。私の理解によれば、インダストリは自発的なものだが、レイバーは強制されたものである。どちらも同じ結果をもたらすが、しかしその政治的帰結は大いに異なる。／それゆえインダストリは自由人へのみあてはまるが、レイバーは奴隷によって遂行されるものなのである。」「インダストリを興すためには、勤労者のあいだに自由がなければならない。勤労者がはたらく動機は、トレードによってみずからのために等価物入手し、これによってあらゆる必需品を買えるようになるとともに、自分の精励の報酬として何ほどか余分が残るということではなければならない。事程左様にインダストリはレイバーと異なる。レイバーは強制されたものであり、たいていはぎりぎりの生存維持に必要なもの以外には、何らの報償もない。」<sup>6)</sup>

みられるように、レイバーが「強制された」労働であり、最低限の生存手段しか保障されないのに対して、インダストリは「自発的」で「自由」な労働であり、勤労者のもとに生活必需品をこえるある剰余をもたらす。レイバーは奴隷の労働であり、インダストリは自由人の労働である。このようにステュアートはインダストリを、ヒューム同様、自由という人間解放的性格において、また剰余形成という生産力的性格において、その意味でポジティブに把握すると同時に、その特殊近代的な性格を照射したのであった。その近代性が「トレードによってみずからのために等価物入手し、これによってあらゆる必需品を買えるようになる」と内容づけられているように、インダストリはすぐれて商品生産的＝商品交換的な労働として特質づけられたのである。インダストリは

6) Sir J. Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, vol. 1, 1767, pp. 166, 483. /は原文改行。

他人のための使用価値を生産し、その譲渡によってみずからには一般的等価物をもたらす、このようにして広汎な社会的分業を形成するところの、社会的労働の謂であった。たんなる自家用の使用価値を生産し、したがって交換によって貨幣を得ることもない非社会的な労働たるレイバーとは、この点でも峻別されるのである<sup>7)</sup>。

インダストリにおけるこの交換価値、一般的等価物への注目、ステュアート経済理論をして、貨幣と販路問題の重視へとみちびき、有効需要とインダストリの人為的・政策的育成という重商主義体系へと帰結させてしまう<sup>8)</sup>。そのかぎりではヒュームからの後退である。しかしステュアートにおいて、(1)ひとしく労働といっても、レイバーとは異なるインダストリの特殊に近代的な質が明確に、ヒューム以上に明確に、えぐり出されたこと、(2)そのインダストリが商品生産というすぐれて社会的な質において俎上にのせられたこと、この二点は十分に評価されるべきであろう。

アダム・スミスの『国富論』（1776年）がヒューム、ステュアートのインダストリ論を前提としつつ、そこから交換価値および資本蓄積の分析へと経済理論を深めていったことは、すでにすぐれた指摘のあるところである<sup>9)</sup>。インダストリはいまや、労働一般として労働価値分析の基盤をなすとともに、生産的労働として資本蓄積の古典派理論のなかへと組みこまれる。「資本(capital)と収入(revenue)のあいだの割合は、どのようなところでも、インダストリ

7) つぎを参照せよ。小林昇、前掲書、195-196 ページ。田添京二「ステュアート蓄積論の基礎構造」、内田義彦編『古典経済学研究』(上)、1957年、125ページ。

8) 小林昇、前掲書、134、172ページ、参照。

9) 「ヒュームやステュアートでは、インダストリという概念の形成にもかかわらず、分析の対象は農業剰余の形成・農民からの工業者の分出・そういうかたちでの人口の増加と配分・これを進めるものとしての『奢侈』の役割等に集中され、さらにステュアートでは……貨幣とステイツマンの貨幣的政策とが、その意義を強調されその内容を積極的に検討されたのに対し、『国富論』では、人口や農業剰余という素材の対象への関心が脱落して商品の交換価値という抽象的对象の分析が正面の課題となり、ここから、ともかくも労働価値説を基礎にすえて、資本主義経済の機構と運行とが自立的・自然的な法則として把握されることとなった。そうしてこのばあい、貨幣の流れに代って生産の構造が重視されるとともに、生産的労働(→蓄積)の概念もまた……剰余価値一般の生産という視角から規定され、同時に『奢侈』に代って『蓄積』が関心的となっているのである。」(小林昇、前掲書、134-135 ページ)

(industry) と怠惰 (idleness) のあいだの割合を決定しているように思われる。資本が優位を占めているところではどこでもインダストリが優勢を示し、収入が優位を占めているところではどこでも怠惰が優勢を示している。それゆえ、資本が増減するごとに、インダストリの実際量、すなわち生産的な人手 (productive hands) の数も自然に増減する傾向をもっているのであって、その結果として、その国の土地および労働の年々の生産物の交換価値、つまりその国のすべての住民の実質的富および収入も自然に増減する傾向をもっている。<sup>10)</sup>

インダストリ対レイバーというステュアートの・歴史的対比にかわって、ここにインダストリ対アイドルネスという蓄積論的対比のうちインダストリが登場してくることは、重要である<sup>11)</sup>。ステュアートにおいてインダストリに対置されたレイバーとは、非貨幣化的・非社会的な強制労働であったのに対して、スミスがインダストリに対置するアイドルネスはすでに、そうやってよければ貨幣めあての社会的労働である。スミスにとって問題は、その社会化された労働がいかなる基金によって養われ、いかなる種類の労働にふりむけられるかにある。収入によって養われ召使などの不生産的労働にあてられるのがアイドルネスであり、これに対して資本によって養われ農工商の生産的労働にふりむけられるものこそインダストリだということになる。ここにインダストリは生産的労働=資本蓄積の根本をなすものと把握され、そのような理論認識をふまえて、インダストリがあらためて近代的生産力の根幹に据えおかれる。スミスのいう「分業」および「商業社会」とは、こうしてインダストリの展開と相即不離のものだったのである。と同時に補言しておくならば、スミスのインダストリが少なくとも『国富論』第2篇では、すぐれて資本によって養われる生産的

10) A. Smith, *The Wealth of Nations*, vol. I, ed. by E. Cannan, 6th ed., 1950, pp. 319-320. 岩波文庫『諸国民の富』(2), 350ページ。

11) 念のためにいえば、スミスにおいてインダストリを歴史的コンテクストのなかで問う観点がないのではない。つぎを見よ。「われわれは、われわれの父祖よりもいっそうインダストリ的である。というのは、現代においては、2, 3世紀まえよりもインダストリを維持するために予定された基金が、ややともすればアイドルネスを維持するために使用されがちな基金に比例してはるかに大きいからである。われわれの先祖は、インダストリに対する刺激が不足していたためにアイドルであった。」(ibid., p. 318. 前掲邦訳(2)347ページ)



労働を意味していたかぎり、ここにヒュームに典型的にみた独立生産者の労働の含意は消滅して、インダストリはあらたに資本-賃労働関係のなかで問われるにいたるのである。ただしスミスの資本関係認識においては、マルクスと異なって、この関係の矛盾的・分裂的側面はまだ前景に登場してこないのであるが。

以上、市民社会思想においては、インダストリは、その主体的・能動的な側面（いわゆる勤勉・勤労）に焦点をあてられつつ<sup>12)</sup>、生産力的にして人間解放的な契機として認識されていたといえよう。インダストリの増大のうちにこそ歴史の光明があったのである。この意味で市民社会の思想家とは、とりまおさずインダストリの思想家であり、さらにいえば産業社会の思想家であった。

### III 初期マルクスにおけるインダストリ

いまやマルクスのインダストリ論を検討する段である。はじめに主として『経済学哲学草稿』（1844年）に即して、これにかんする初期マルクスの認識を取りだしておきたい。その『経哲草稿』は、スミスのみでなく D. リカードウ、J. ミルをも視野に入れつつ、市民的経済学の基本性格をこう総括する。「国民経済学は近代的インダストリの一産物とみなされるべきであるとともに、また私的所有の現実的なエネルギーおよび運動の一産物ともみなされるべきだということ、……同時に他方では国民経済学がこのインダストリのエネルギーと発展とを促進し、讚美して、意識上のひとつの方にまでしたということも、おのずから明らかである。」<sup>13)</sup>

マルクスの見るところ、国民経済学は近代的インダストリの産物であるとともに、その促進者・讚美者としてある。古典経済学はインダストリの申し子で

12) 岡田純一「インダストリーとはなにか——スミスとセイにおいて」、岡田編『古典経済学と産業』1979年、43ページ、参照。

13) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, in MEW, Ergänzungsband, Erster Teil, 1968, S. 530. 岩波文庫『経済学・哲学草稿』119ページ。国民文庫『経済学・哲学手稿』135ページ。

あると同時に、いわば育て親であり、こうして両者は命運をともしているというのである。であればこそ、インダストリがまだ希望であった時代のスミスはともかく、産業革命をへてインダストリの矛盾にみちた現実<sup>14</sup>に直面せざるをえなかったリカードウらにいたると、経済学は人間承認の外見のもとでの人間否認の学へと変身してしまうのであるが、この古典経済学のシニズムはとりもなおさず近代的インダストリのシニズムの首尾一貫した表現にほかならない。「国民経済学のシニズムは、スミスからサーを経てリカードウ、ミル等等へと進むにつれて、インダストリの諸帰結がいっそう発展した矛盾にみちた姿で後者〔リカードウ、ミル等〕の眼前に現れでるかぎり、相対的に露骨さをます。……彼らは人間を本質とすると同時に非本質としての人間を本質とするのであるから、現実の矛盾は、彼らが原理として認識したところの矛盾にみちた本質に完全に照応している。インダストリの分裂した現実<sup>15</sup>は、彼らの自己分裂的な原理を否認するどころか、かえって確認するのである。彼らの原理とは、こうした分裂性の原理なのだ。」<sup>14)</sup>

こうしてマルクスにおいては、当初から、インダストリは分裂的でシニカルなもの以外ではありえない。いや、すでにリカードウらによって即自的に表明されていたこの分裂性を、経済学批判として対自化することこそ、課題であった<sup>15)</sup>。あるいは、スミスが資本-賃労働関係のなかにおいたインダストリを徹底的に押しつめてみることに、しかも19世紀中葉という現実のなかでクリティカルに掘りさげることが、重要であった。そのインダストリにかんして初期マルクスは、一方でつぎのように語る。

「インダストリの歴史とインダストリの生成しおわった対象的現存在とが、

14) *ibid.*, S. 531. 岩波文庫121-122ページ。国民文庫137ページ。角括弧内は引用者、以下同じ。

15) 『経哲草稿』は市民的経済学の分裂性をつぎのように批判する。「国民経済学、この富の学問は、同時に断念、窮乏、節約の学問であり、そして実際それは、きれいな空気とか身体の運動とかの欲求さえも、人間に節約させるほどになる。この驚くべきインダストリの学問は、同時に禁欲の学問である。」(*ibid.*, S. 549. 岩波文庫153ページ。国民文庫168ページ)「インダストリは、欲求の洗練化〔ヒュームの奢侈!〕にも思惑をやるが、同様に欲求の粗野、しかも欲求の人工的につくりだされた粗野にも思惑をやる。」(*ibid.*, S. 552. 岩波文庫159ページ。国民文庫171ページ)

人間的な本質諸力の披かれたる書物 (das aufgeschlagne Buch der menschlichen Wesenskräfte) であり、感性的に提示されている人間的な心理学であることは明らかである。「インダストリは、人間にたいする自然の、したがって自然科学の、現実的な歴史的関係である。だから、もしインダストリが人間的な本質諸力のエクソテリーリッシュな披瀝としてとらえられるならば、自然の人間の本質あるいは人間の自然的本質もまた理解されるであろう。」「人間の歴史——人間社会の成立行為——のなかで生成していく自然は、人間の現実的な自然であり、それゆえ、たとえ疎外された形態においてであれ、インダストリを通じて生成する自然は真の人間学的自然である。」<sup>16)</sup>

インダストリのうちには「人間にたいする自然の<sup>グイェルリッヒ</sup>現実的な歴史的関係」が伏在しているのであって、このかざりで、実際にはそれがたとえ「疎外された形態」にあろうとも、なおかつインダストリは「人間的な本質諸力のエクソテリーリッシュな披瀝」「人間的な本質諸力の披かれたる書物」として捉えられるべきである。こう語るマルクスは、明らかにインダストリのうちに人間と自然との物質代謝過程を透視している。後年のマルクスならば、物質代謝過程の媒介者を「インダストリ」とは区別された「労働 (Arbeit)」の語のうちに見定めるであろう。が、初期にあっては、ややもすると「労働」は「インダストリ」ときわめて近い位置におかれたうえで<sup>17)</sup>、そのインダストリ=労働のなかに、人類の歴史貫通的な物質代謝営為という含意がこめられている。それが上引の文章であり、さらには『ドイツ・イデオロギー』(1845~46年)において、「インダストリと交易がなかったらどうして自然科学などありえようか」、「《人類の歴史》はいつでも、インダストリおよび交換の歴史とつなげて研究され、仕上げられなければならない」<sup>18)</sup>と述べられるときの、インダストリの含意である。

16) *ibid.*, SS. 542-543. 岩波文庫141-143ページ。国民文庫156-157ページ。

17) 例えばこう語る。「工場制度はインダストリの、すなわち労働の成熟したあり方である」、「すべての人間的活動はこれまで労働であり、したがってインダストリであった」と (*ibid.*, SS. 533, 542-543. 岩波文庫124-125, 141ページ。国民文庫140, 156ページ)。

18) K. Marx / F. Engels, *Über Ludwig Feuerbach*, Reclam, 1972, SS. 21, 24. 花崎皋平訳／

ただし、インダストリ＝労働のこの超歴史的認識は、初期マルクスに即するとき、あくまで事の一面、しかも相対的に弱い一面であって、『経哲草稿』は他方、インダストリを特殊歴史的なものとして把握しようとの強い視角を包蔵している。インダストリは「封建的」なもの、「土地所有」的なものに明確に対置されて<sup>19)</sup>、固有に近代を性格づける概念とされているのである。このかぎりでは前節にみた市民的思想家と共通しているのであるが、しかしその特殊近代性の認識内容にかんしては180度転換する。リカードウ以後のマルクスにとって、歴史的に現前しているインダストリがポジティブなものであろうはずがない。さきの引用文でも、インダストリを通じて生成する自然は「疎外された形態」でのそれではないことが指摘されていたが、自然のみならず人間の活動そのものも、近代的インダストリのもとではネガティブな姿でしか存在しないのである。「すべての人間の活動はこれまで労働であり、したがってインダストリであり、自己疎外された活動であった」<sup>20)</sup>、——こうマルクスは断言するのである。

インダストリは現実には、資本-賃労働関係に包摂されていて、人間の自由な意識的活動でありえず、諸個人の生の表明でも自己実現でもありえない。こうして初期マルクスにおいて、インダストリ＝労働は今度はすぐれて批判の対象として俎上にのせられる。しかもこの面こそ重視されるのである。市民的思想家と異なってマルクスにとっては、インダストリのうちには自由も人間解放も存在しないのである。『ドイツ・イデオロギー』がしばしば語る「労働の廃止」テーゼは<sup>21)</sup>、とりもなおさずそのようなインダストリの廃止宣言であり<sup>22)</sup>、

『新版ドイツ・イデオロギー』1966年、51、58ページ。

19) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*……, *op. cit.*, SS. 509, 532-533. 岩波文庫82, 124ページ。国民文庫94, 139-140ページ。

20) *ibid.*, SS. 542-543. 岩波文庫141ページ。国民文庫156ページ。

21) K. Marx/F. Engels, *Über Ludwig Feuerbach*, *op. cit.*, SS. 36, 68, 72. 前掲邦訳79, 135, 142ページ。

22) つぎを参照せよ。「マルクスは1844年の『経済学・哲学草稿』においても『ドイツ・イデオロギー』においても、しきりに、『労働（あるいは生産、インダストリー）の終り＝止揚』を主張している。』『私的所有の廃棄』は労働やインダストリ（疎外された労働）の終りと同義であらう

このインダストリ批判の観点は中期マルクスにおいていっそう深められていくだろう。

#### IV 中期マルクスにおけるインダストリ

初期マルクスがインダストリ＝労働のうちに、歴史貫通的な物質代謝過程と同時に特殊近代的な疎外された活動を、そのかぎりでのインダストリの二重性を確認していたとすれば、中期マルクスにおいては、両側面の識別はいっそう截然となる。これは用語法にも反映され、「インダストリ」の語はいまや特殊近代的な労働を指すものへと限定され、物質代謝過程一般を含意するのは「労働」の語の役割となる。否、労働概念は、いわゆる労働の二重性の萌芽的認識にも端的に示されるように、基軸的かつ内包ゆたかなものとなっていくのであるが、対するにインダストリは、細かくみれば多彩なニュアンスがあるものの、基本的には、特殊近代的に変型された労働、『経済学批判要綱』（1857～58年）がしばしばつかう言いかたによれば *industrielle Arbeit*（インダストリの労働、産業労働）を意味するものへと収斂してくるのである。そのような近代的労働としてのインダストリは、では、いかに内容づけられているか。

インダストリとは第1に、交換価値生産労働であり、貨幣めあての労働である。『要綱』はいう。「一般的なインダストリは、すべての労働が富のある一定の形態ではなく、一般的富〔貨幣〕を生産するところでだけ、したがってまた個人の報酬が貨幣であるところでだけ、可能である。さもなければ、技巧上の熱意（*Kunstfleiß*）の特殊な諸形態がありうるにすぎない」、「貨幣が労働者の交換の成果であるので、幻想としての一般的富が労働者を駆りたて、彼をインダストリ的にする」<sup>23)</sup>、と。このような貨幣めあての労働が成立するためには、商品生産＝交換が全面的に展開し、社会的分業＝社会的労働の網目が広汎に織りあげられていることが、当然ながら前提となる。したがってマルクスは、

ゝる。」（今村仁司『労働のオントロジー』1981年、234、266ページ）

23) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, 1953, SS. 135, 200. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』1958～65年、(I)143、(II)212ページ。

「あらゆるインダストリの一般的基礎となるものは、一般的交換そのもの、世界市場、したがってまた世界市場を構成する諸活動、交通、欲望等の全体である」<sup>24)</sup>ともいう。こうしてインダストリとは、『要綱』マルクスにとって何よりもまず、交換価値（貨幣）を目的としかつそれに媒介された社会的労働を意味するものであった。

とするならばこの点で、あのステュアート・インダストリ論に多くを負っていることは、すでに明らかであろう。事実『要綱』の直後、マルクスは『経済学批判』（1859年）でステュアートに高い評価をあたえる。「ステュアートがその先行者や後継者からぬきんでいた点は、交換価値で表示される特殊社会的労働と、使用価値を目的とする現実の労働とははっきり区別した点である。

『その譲渡 (alienation) によって一般的等価物 (universal equivalent) を創造する労働を、わたしはインダストリとよぶ』と彼はいう。彼はインダストリとしての労働 (Arbeit als Industrie) を現実の労働 (reale Arbeit) から区別するばかりでなく、労働のほかの社会的形態からも区別する。インダストリとしての労働は彼によれば、労働の古典古代のおよび中世的形態に対立する労働のブルジョアの形態なのである。<sup>25)</sup> ステュアートこそはそのインダストリ概念をとおして、「労働のブルジョアの形態」を、すなわち「交換価値で表示される特殊社会的労働」を、明晰にえぐり出していた、というのである。

第2にインダストリは賃労働である。資本制的関係が展開した産業革命後の世界にあっては、貨幣めあての労働といっても、それは単純商品生産の形態において表象されるべきでなく、むしろ賃労働としてあったはずである。インダストリとはすぐれて資本関係のもとでの賃労働としてしか存在しない。マルクスは再びステュアートを念頭におきつつ、その賃労働を奴隷制下の労働（ステュアートのレイバー）と対比させて語る。「自立した富は総じて、直接的強制労働である奴隷制によってか、媒介された強制労働である賃労働によってか、

24) *ibid.*, S. 426. 前掲邦訳(Ⅲ)464ページ。

25) K. Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, in *MEW*, Bd. 13, 1964, SS. 43-44. 岩波文庫『経済学批判』66ページ。国民文庫、同、68-69ページ。

そのいずれかによってのみ存在する。直接的強制労働にたいしては、富は資本としてではなく、支配関係として対立する。……この支配関係はけっして、一般的なインダストリを創造することはできない。」<sup>26)</sup> 奴隷制はインダストリを創造できない。インダストリは近代資本制の産物である。この奴隷制対インダストリというステュアート図式を受けいれつつも、しかしステュアートがインダストリのなかに見たものが解放された自由な労働そのものであったのに対して、マルクスはインダストリを「媒介された強制労働である賃労働」と規定する。あるいは他方、インダストリの階級関係的把握というスミス図式を継承しつつも、スミスが賃労働関係のうちに強制関係を見ることはなかったのに対して、マルクスの賃労働は「媒介された強制労働」となる。マルクスにとってインダストリ＝近代的賃労働のうちに存するものは、究極のところ、自由の反対物でしかなかったのである。

ただし、ひとしく「強制労働」ではあっても、賃労働が「直接的」なそれではなく「媒介された」それだということは、やはり決定的な相違である。媒介性のゆえに成立する自由と自主の仮象的意識をとおして、結局のところ、賃労働は剰余生産への積極的のモメントとなるからである。ここから賃労働としてのインダストリは、すぐれて剰余労働という契機において、さらにいえば生産力の契機において、取りだされてくる。「個人は他の個人のための必要をも、必要をこえる剰余をも同時にみだすことによってはじめ、彼自身の必要をもみだすことができる。……奴隷制のばあいでは、この点は粗野なものであった。賃労働の条件のもとではじめて、それはインダストリ、インダストリ的労働となる」、「資本のうえにうちたてられた生産は、普遍的なインダストリ——すなわち剰余労働、価値をつくりだす労働——をつくりだす……」、「剰余労働日はインダストリの労働の第一の契機である」<sup>27)</sup>、と。

ところで第3に、以上のような交換価値形成労働、さらには賃労働＝剰余形

26) K. Marx, *Grundrisse*……, *op. cit.*, S. 232. 前掲邦訳(Ⅱ)247ページ。

27) *ibid.*, SS. 305, 313, 654. 前掲邦訳(Ⅱ)330, 337, (Ⅳ)722ページ。

成労働の基底をなすものとして、マルクスが近代的インダストリの根源に透視していたものは、労働が自由と責任の意識に媒介されることによって<sup>28)</sup>、労働が肉体的・精神的にある質的転換をこうむるということである。「近代的インダストリでは一般に勤勉 (Fleiß) は労働者の判断にまかされている」のであって、労働者のこの主体的判断にもとづく「勤勉」は、奴隷制のような強制されたそれとは異なって、禁欲、集中、持続、効率を内面の声として聞きしたがうあたらしい労働質を形成する。「労働の中断はインダストリの労働の第一の基本諸条件と矛盾する」のであって、生産・蓄積・貨幣の呪縛に憑かれた禁欲的（自己抑圧的）かつ攻撃的（他者抑圧的）な人間類型がアウスポイテンされ馴化される。競争がそれを倍加し、こうして人々は労働動物としての自己形成へと疾駆する。労働はここに、想像力・審美眼・遊戯性を剝奪されて、ただの「一定のかたちに調教 (dressieren) された自然力としての人間の緊張」<sup>29)</sup> とよぶにふさわしい所作へと変質する。それこそ、『要綱』マルクスが究極的に見ていた近代のインダストリ（産業労働）なのであり、近代が宣言した自由と主体なるものが編制され回路づけられていく世界なのである。

近代社会とは何よりもまず、上來みてきたような意味でのインダストリ社会なのである。このようなインダストリを創出することによってこそ、近代は大工業 (große Industrie) としての組織的・生産力的体系へと行きつく、——「大規模な労働の導入ならびに機械の充用がはじまるということは、インダストリ

28) 別の機会にマルクスはつぎのように述べていた。「奴隷に比べれば、資本家のために労働する労働者の労働は強度がより高くなるので、より生産的となる。なぜなら奴隷は、ただ外的な恐怖に駆られて労働するだけで、彼の生存のために労働するのではない——彼の生存は彼には属さず、しかも保証されている——から。これに反して自由な労働者は、自己の欲望に迫られるのであるから。自由な自己決定の意識（あるいはむしろ表象）、自由の意識（あるいはむしろ表象）やそれに結びついている責任の感情（意識）は、自由な労働者を奴隷よりもはるかにすぐれた労働者にする。……主人を必要とする奴隷とは反対に、労働者は自分自身を支配することを知っている。」(K. Marx, *Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses*, Archiv sozialistischer Literatur, 17, 1969, SS. 57-59. 岩波文庫『資本論綱要』198-201ページ。国民文庫『直接的生産過程の諸結果』98-101ページ)

29) K. Marx, *Grundrisse*..., *op. cit.*, SS. 197, 562, 505. 前掲邦訳(Ⅱ) 208, (Ⅲ) 619-620, 555ページ。



の発展の成りゆきである……」。中期マルクスは眼前の「近代産業社会 (moderne industrielle Gesellschaft)」<sup>30)</sup> をこういう地平から批判的に認識したのであり、そしてこれはやがて、『資本論』(1867年)の労働＝大工業分析にさいして暗黙の前提をなしていく。

以上、市民思想との対比のなかでマルクス・インダストリ論を見てきたわれわれにとって、いまやつぎの諸点は明らかであろう。すなわちマルクスは、インダストリの特殊近代的性格、生産力的性格の認識において市民思想を継受する。しかしマルクスにあっては、その生産力的性格の背後に横たわる資本関係的性格(インダストリのアウスポイトゥングへの転回)こそ正視すべき課題となってくる。同じくまたマルクスは、奴隷制とは異なるインダストリの自由で主体的な側面を見定めるのであるが、しかしその自由の認識は、市民思想のようにただちにインダストリの解放的性格の讚美には帰着しない。むしろその自由を虚焦点として、労働がネガティブに変型され調教されてしまうことへの批判こそが、彼の基礎視角となるのである。当然のことながら、18世紀市民思想を特徴づけたインダストリの増大というテーマは、マルクスからは消滅する。

いや、たんに増大が否定されるだけでない。マルクスにとってはインダストリのうちには真の自由は存在しないのであって、およそインダストリそのものの超克こそが課題なのであった。自由はさしあたり、インダストリの彼方に、『要綱』的にいえば自由時間のうちに存在しうるのであって、この自由時間の原理でもってインダストリの原理に反作用をくわえ、これを解体していくこと、ここにこそ主眼点があったのである<sup>31)</sup>。この意味でマルクス体系は、まさにその思想の根本性格において、インダストリを超える思想でこそあれ、インダストリアリズム(産業主義)のそれでは全くない。われわれはマルクス「経済学

30) *ibid.*, SS. 661, 136. 前掲邦訳(IV) 729, (I) 143ページ。

31) 山田鋭夫『経済学批判の近代像』1985年、356ページ以下、参照。

批判」をこのようなものとしての産業社会批判として読みかえすことから再出版すべきであろう。